

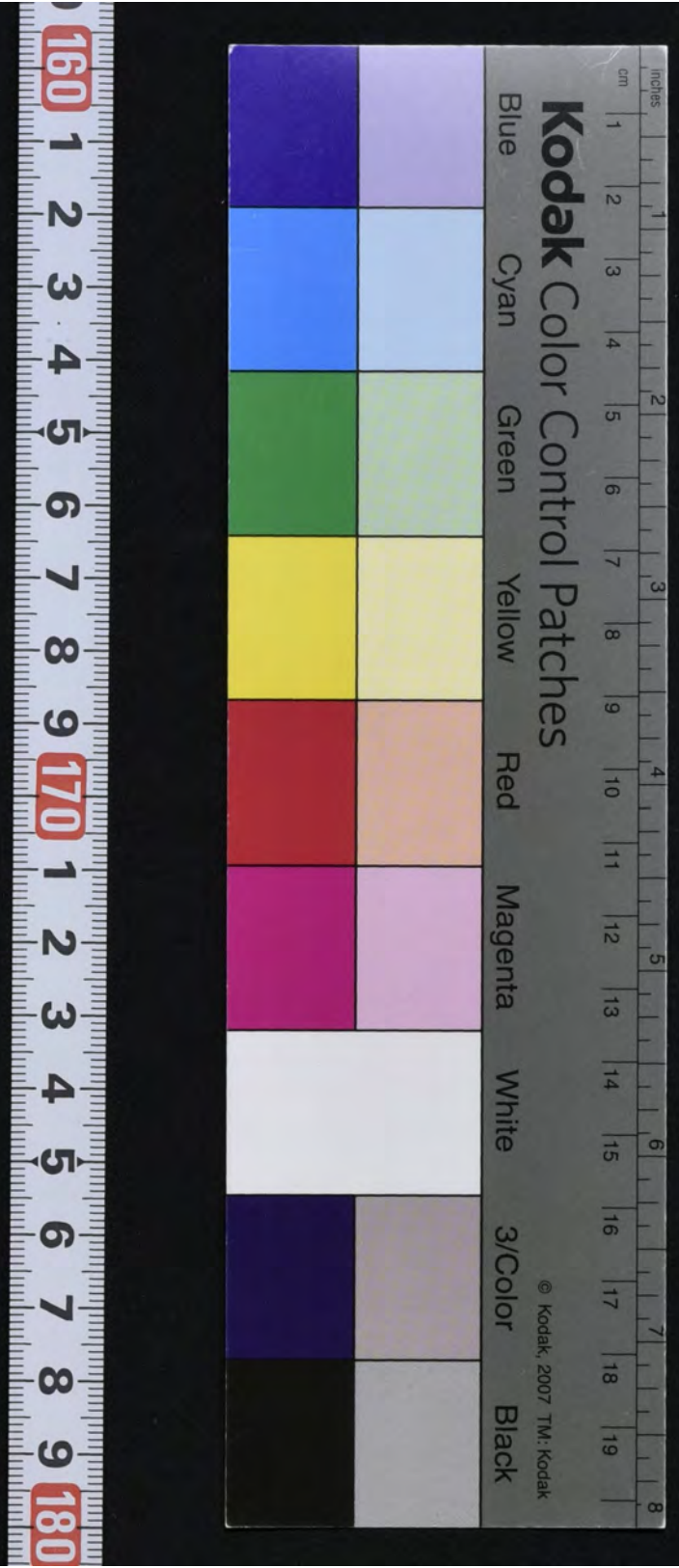
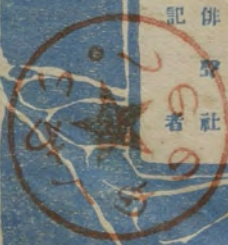
白虹

號 三 第

目 要

虹	金	拾	最	そ	小	友	疎	二	人	花	紫	夜	道
霓	鏡	扇	敬	の	百	人	人	類	類	類	類	類	類
雜	談	風	扇	禮	朝	合	よ	律	立	環	苑	苑	苑
(時報)	(俳句)	(美文)	(美文)	(美文)	(美文)	(美文)	(新詩)	(短歌)	(美文)	(美文)	(美文)	(美文)	(新詩)

記	俳	松	川	與	依	平	小	村	清	鹿	河	鈴	服
者	聲	田	上	謝	田	塚	川	山	水	目	井	木	部
	社	竹	五	野	欣	紫	竹	鳥	橋	夕	醉	薄	躬
		嶼	浪	鐵	阿	袖	軒	徑	村	雨	茗	暮	治



素娥會清規

「われらは崇高なる詩美を樂しまむがため、また腐敗せるわが青年の思潮を高めむがため、雑誌『白虹』を公刊す。われらは修養の時と雖も、幼きわれらは、未だ模倣の詩、淨き交誼を形つくり、體を『素娥文學會』と門諸家の撰擇を経て、毎月金拾錢を送らるべし」

氏名	奥原氏
購寄研他	購寄研他
館名	大短女子根島圖書館
番號	86701
期	4-1

「會友に無代價を以て雑誌『白虹』を配布す。一來れ、來れ。去るものは追はず。」

東京市日本橋區大傳馬町二丁目
廿一番地文友館内

素娥文學會

前	號	細	目
蒲原有明	涼	七	虹
内藤鳴雪	轉	白	美
鹿目夕雨	扇	小	白
鳳晶子	染	狐	霓
河井醉茗	扇	舞	美
久保天隨	扇	彩	霓
與謝野鐵幹	扇	影	霓
永井破笛	扇	松田竹嶼	霓
木兔生	扇	あふち會	霓
	扇	依田秋圃	霓
	扇	鈴木薄暮	霓
	扇	同	霓
	扇	しら	霓
	扇	記	霓
	扇	與謝野鐵幹	霓

文學士 上田敏君著

みをつくし

『みをつくし』は海外今文の翻譯にして佛、伊、獨、露、米、西、近代名家の短篇十數種を收む。歐米最近の思潮をやまどの言葉に和らげ、聊か耳新しき調をなしたれば、古語の復活、新詞の創作ありて舊様の文字に異なるを特色とす。

見本を要せらるる方は郵券二錢を送附せらるべし

東京市日本橋區大傳馬町二丁目二十一番地

發行元 文友館

九月下旬發行
紙數凡三百餘頁
定價八拾錢

青年機關

文海指針

新思潮

●第一卷第五號 (九月十五日發行)

每月一元
定價一部金八錢
郵稅一錢

新思潮は青年文壇の中堅として我文學界の思潮を紹介せんが爲に生れたり本誌は其三分一に諸大家の新作を載せ其三分二に青年諸君の寄稿を掲げ以て知名の文士近業に係る佳什を紹介すると同時に修養時代に於ける青年作家の寄稿を掲載し如くにして我國思想界の代表者たらんとを期す本誌の特色とする所は知名の大家に阿らず無名の文士を侮らずして最も公平に最も信率に是れが作品を紹介するに在り、要するに新思潮は虚名なくして實力ある青年の俱樂部にして自信を枉げず本領を失はず主義に依りて動き信仰に従つて行ふの決心を有する青年の自由郷なり

投書規則

本誌は毎號懸賞の方法に依りて大に寄稿を歓迎す選評は散文韻文を問はず何れも斯道大家に請ふて丁寧親切に選擇す

●賞品○一等金參圓相當物品一人○二等金壹圓同二人○三等金同五拾五人○四等金同貳拾五錢拾五人●投書畧則○用紙は半紙大にて一枚二十行○一行二十四詰●原稿は楷書にて認め天地左右に相當の餘白を存すべし○原稿には必ず住所姓名を明記すべし○原稿には題の上に作品の種類を明記すると共に「新思潮」原稿と朱記すべし。

發行所 東京麴町三番地 鳴臯書院 發賣元 東京神田代町 集成館



每月一回
二十日發行
六號既刊
一部金拾貳錢
郵稅金壹錢

新派に偏せず舊派に黨せず廣く俳諧を研究せんと欲するもの聊か斯道に志すもの坐右に放つべからざる羅針盤なり每號の記者は左の數氏なり

紅葉、四丁、烏黒、殘花、秋劍、愚佛、無黃、松宇、魯庵、
知十、竹嶼、天隨、洒竹、小波、無角、竹冷、雀志、機一、
半翠、等

東京小石川區武島町十五番地

俳聲發行所

大賣捌 東京堂 北隆館 集成館

虹白

第三號

神	お	知	間	い	さ	直	ふ	な	直	麻
や	の	ら	は	づ	て	き	も	ほ	き	は
何	づ	じ	む	れ	も	壺	ぎ	し	壺	ら
と	か	ら	知	直	い	は	ふ	と	に	の
告	ら	じ	ら	き	ふ	あ	の	や	た	よ
め	の	み	る	性	か	ら	の	そ	つ	も
む	壺	づ	や	格	蓬	じ	蓬	の	て	ぎ
	た	か	蓬	ぞ	と	を	に	壺	ふ	は
	ち	ら	生	も						

道たゞに

躬

治

東京新詩社編 小説青燈集

内容

黒二旅病渡痛若金野そ女斧我高

發 賣 所	等	銘	酒	屋	罪	舞	人	佛	子	計	垣	録	子	犬	僧	れ	瞳	目下印刷中
	守	の	詩	の	撫	時	葉	恨	の	親	人	づ	定價五拾錢					
文 友 館	小	中	泉	草	廣	柳	大	川	德	小	中	泉	廣	上	田	田	紙數三百餘頁	
	杉	村	村	津	川	塚	上	田	栗	村	津	田	柳	鏡	柳	鏡	郵稅六錢	
	天	春	鏡	北	柳	春	緒	眉	秋	風	春	鏡	柳	鏡	柳	柳		
	外	雨	花	星	浪	葉	子	山	聲	葉	雨	花	浪	敏	君	君		
	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君	君		

たぞや強ふる嬌めよと
わが生命われ知る
とこしなへにわれ知る
いつの日か世に似む
世は趨れ世は行け
われはとほに動かじ
あらずこゝにわが道
それふこゝにわが道
道ぞたゞにたゞにや
あはれいかにおもしろ
日月天におし照る
わが世われに幸あり
直^{ナホ}思^ヒそれ頼ます

夜白花

第六

川は幅十間にもあまりぬらむ。岸には茅^ち萱^かなど少しばかり茂りつ。
流れ澄みて緩^{ゆる}やかに、星の影あまた寫りてゆら／＼と動きぬ。
女かゝる所に始めて來しぞとよ。
「あのね、向ふ岸へ越されるかどふか見て來るから、一寸待つて頂
戴な」

馬引きて、靜に川に入りしが、浪の輪えがきて、星影くづれつ。
「浅いの、姉さん。」

「浅いよ／＼」

水ゆく馬の鈴の音、チリン／＼とばかり、げに快き。
われはあゝみて、あゝら咲ける白き花、摘みては捨てぬ。
「面白いぞや今咲く花は——」

聲遙かにうすれゆくが川の中より聞けたれど、われよき花摘みて女に見せはよと思ひて、ひたすらにうしろのあたり見まわせる。

「後のちりばは——」

再び細く細く聞ゆぬ。

花また摘みたれど、心になかなひたるがなかりき。

と、ホウホウとばかり。

再び、また三たび同じ聲せる。

あたりには何の影もなし。女、いつまゆきけむ。これも見えず。

水の流湍つとして、茅萱夜風にさゝ、さゝと鳴りぬ。

又、ホウ／＼と同じやうに鳴くなる。怪しきかな。鳥ならではか

なはずと思ひぬ。

「しつ、しつ」と聲せる方にねらひ定めて、摘みたる花少しばかり

投げし。花ばら／＼と飛びしが、皆遠くには行かて落ちぬ。

聲はちよと止みしが、やがてホウホウと三たび啼きぬ。

「しつ。しつ。」と追ふ真似したれど、そは何知らず恐ろしうなれる。

聲高く絞りて、女をもとめり。

遂に答なし、如何にかしけむ。

それと思へば、どみに寥しさつので、白き花、森の火、水の音、さゝなり、鳥の聲など、皆たゞにあはくぞなりたる。

摘みもてる花六七本、片手にせるまゝ、ひたばしりにかけ出せる。

川の岸の細き道傳ひにて、かけて、かけて、かけぬ。五六町も來

しと思ふ頃、遽に息苦しう覺えて、倒れき。

氣つけば、流れに沿ふて下り來りし。

川は幅愈々廣く、わがすぐ前は、深き淵なして、水うづまきて流

る。

此時、萬籟聲なし。

寥しき處に來しよ。女、やさしき姉上に似たるものなつかしの女、いつまを如何に行けむ。歸らんに途知らず。ゆくべき處もなき。あたりを見れば家らしきはあらで、たゞ白き花の野なる。

「姉さん！」

あるほどの聲を絞りて、一たび二たび三たび、またもとむれども
たはていらへぞなき。

凝と立ちて、黙して、耳傾くれば、水車の音の、遠くかすれつ、
がたんかたんとばかりにて。

ふと氣つけば、さきに摘みたる花、右手にしかど握りたるまゝな
り。今は花も用ぞなき。一つ一つ淵に投げつ。

「面白いぞや今咲く花は後のちり場を知らねども——」

かくて今は泣聲絞りて、唄うたひたる。その唄きして、もしや、
なつかしき女の、われを尋ね來でかど、今はなか／＼にはかなさね
がひなりき。

「面白いぞや今さく花は——」

衝突如、眼の前に見ゆし。ばつと白う煙りてしが、やがてろはな
つかしの女なるをたしかめ得たる。淵の水荒く巻きて流るゝ上、衝
と其姿表はして、我を招ぎつ。

「姉さん！」

とばかり、前後も知らず、飛びつきたり。

憂ひと、悶みと、迷ひと、頼らひと、ろは夜の神の衣手深く包ま
せたまひ、休息と、安眠とを與へて、悉くおれを醇化させ、美化さ
せ、たまふ。

あはれ此時、紅の星、人の世ちかく下りぬ。知らず、ろの後の消
息、そを神ならで誰か告げ得るものありや。

第七

やさしき母上は、其夜わがあとを追ふて、神より外には知るもの
なき我が一度の死より我を救ひたまひつ。

かの女、やがて京に賣られぬと、いつなりけむ、母上話したまひ
ぬ。

(をわり)



紫苑

ちぬ男

旅の子の額白きに過ぎたり、女ならば、まだ前髪あげぬとし頃を、
道芝の露に瘦せゆくは、きびしき母や持ちたりけむ。

もろ手伸ばして、草鞋の紐の解けたるを結ばんとするに、胸打ち
ふるひぬ、かすかなる地ひいきして心地ふらくとすると、それよ、
秋はなる多しと、つぶやきつゝ、空にたゞよふ根なし雲を見あげた
り、草の上におろしたる腰のあたりは、紫苑ひとつと、ゆらくと
うなづきぬ、旅の子の眼にはとまらざりき。

又行く、二三町にして、紐打ちゆるみぬ、このわらんづの心もと

なさよと、片山かけの石にゆけば、ろまにも其花あり、心にはとま
らざりき。

果して四五町ゆくうちに紐は切れぬ、落ちやすき日の斜なれど、
雲井のはては遠かるにと、旅の子は行く手を止められたらんが如く
イめり、若うして急ぐは戀しらぬにやあらむ、宿かしまるらせむか
紫苑は其裾にさゝやきぬ、聞こえざりき。

七つから男を戀ひて紫苑の花とは生れけるよ、菊に肖て世に長け
ぬがあはれなり。

秋 圖

病む伯母を見舞ふてかへる下京や鶴時雨れて風寒うなりぬ

小馬にてすぎゆくくすし夕ぐれの萩の堤にまたかくれたる

花 環

夕

雨

(下)

御墓に靠れながら、疲れたのらしく、美いちちゃんは玉を懐に抱き占めた儘、罪もない顔にスヤ々々と寝入つて居る。

それで、風が石碑から石碑を吹いて、頓て黒い髪の毛に觸はると、サラ／＼と靡いて、眞白な額に小波を打たせた。紅の頬には何となく愉快相な影も見られるので。

毎日一つ宛は怠りなしに、屹度ね供へした花環は、もう大方お墓の上で萎むてしまつた。

『まア——母ちゃんの着物、綺麗なねエ……』

みいちちゃんは驚ろいた様に目を見張つて、つく／＼、阿母さんの容子を見上げた。

『そんなに長いの着て、歩かれは仕ないてしやう。エ、母ちゃん、どうするの？』

何と言つても阿母さんは、只黙つてばかり居らつしやので、地烈他くつて泣き出し相にすると、今迄呢ど此方を見つめて居られたのが、此時優しい手を延べて、つむりを撫でてやりながら、

『オ、美いちちゃん。好くお出でだつたね……妾は、お前が毎日、お花持つて来てお呉れなので、どんなにか妾嬉しかつたらう。——妾の御國にはそれは／＼、綺麗な美しいのが澤山あるけれども、妾にはね前のが一番ね……』

言ひ淀むで、目を潤ませながら、ソと臉を押へて、俯向勝ちにホツと細い溜息をする。

寝ても覺めても、泣く暇も笑ふ間も、一寸も忘れた事のない戀しい阿母さんと斯うして、一緒に居ると云ふのは、美いちちゃんに取つて、此より嬉れしい事はもう／＼無いのである。

『そう、妾は母ちゃんのおね國、お花無いんだと思つたわ。だつてね

母ちやんは遠い、淋しい處へ行つたむでしやう、だから妾は玉ちやんと二人で打たれたつて關はずにね、毎日、持つて来て上げたのよ。』

と頭に置かれてある、片手にぶら下つて、

『だけど母ちやんは、もう何處へも行かないむでしやう、行かないむです。……もしか、ろいても母ちやんが歸るのなら、妾も一緒に連れてつて頂戴よ。……でなければ妾、家に居る厭いな母ちやんに打たれるんですもの、玉ちやんだつてねエ……』

『左様かい、可哀相に』

と微笑に言つて、諸手に挿と美しいやんの肩を抱きしめながら、頬と頬と摺り當て、そしてさめくと泣いた。

『連れてつて上げてもいいのだけれど、それはね、山越へて谷越へて。……そら何日か、美しいやんが、帯の様だつて言つたつけ、高い、空の虹ね。……其虹のお宮なんだもの。いけないよお前……』
細い両腕を、靜かに胸に組むて、腕と考へて居られたが、

『あゝ。ろれては好いもの上げましやう。……是をね』

と眞白な着物の乳の邊に挟むてた、衣と同じ色の而も大辨な百合の花を抜き取つて、

『是をね。母さんに逢ひたくなつた時に、ね前が口を當て、母ちやんと呼ぶとね、何時でもわたし来るから……ねわかつたかい』

『厭だ、厭だ妾。母ちやんと一緒に……母ちやんが歸るのなら、妾も連れてつて、頂戴よう！』

離れまいと思つて、しがみ附く途端。ほら、と香り高い、異様の煙が立ち昇つて、同時に、爽々した音楽が響き出すと思ふと、戀しい懐かしい阿母さんの妾は、段々と其煙に包まれて朧らになつて行くので

『あつー』

と云つた切り。ばた、と走り寄つて、危一髪。やつとの思ひで白雲の様眞白な、風に吹かる、長い、御裾の端に、みいちゃんの小さな手が、届いたと見ると

夕暮の鳥が一羽、お墓の上から啼きもせず、驚ろいた様に飛び上つたが、其時。石碑はグラ／＼と身搖ぎして、頓て凄まじく、み
いちゃんと言と玉とが上へ倒れたのである。

あゝ、本統に倒れたのだ。

けれど、けれど。みいちゃんが手づからお供へした花環の数は、
今刹那に生々と蘇つたので。』

それが、花環は皆んなで七つ、みいちゃんの年と同じであつた。

(丁)

大 風

○
ひとり居や蚊やを通して夏の月
月かげのうつるや瓜の浸し水

人籟に寄す

橋 村

まのゝめ草に落ち
さふらんなせる朝の
光 ひ る ころ
森のかげあたり
き ふ き く
鈴の音 き こ づ。

アロンあした祈り終て
野にかへりくか

いなそは知らす
廣 瀬 川 の
水清く石青きほとり
ふかき木かげに

宮をくんだりて
生れし星の子ひとり
朝なさな都にいて
詩を説く

みやびなき子らは
たゞ戸にいであ
金の冠絹の衣
朝のひかりうけて
黄にむらさきに紅に
七色かゞやくを見む。
高く崇うとき姿
まづ酔ふものなきや
こがれの翼
白銀のくつにかへて

ちり雲たゞざる
山の秀めるに下り
季ひく神の
うたなきけや。

草の葉にふれてなる鈴
夕ぐれのそらに高し。
み袖のばらの花かほりて
はえある野の七百里



おぼしまによれるしげしなやみあり春の入日の京の清水
矢飛目の紫すきやらうたかりきかのほゝみはいつの涙か
京そめの友禪模様あせすあれやふり袖たけの二尺七寸
うつぶきてとのも云ひあへす見もあへす遂にわかれしおとしの君
君が遺稿更に泣きてや見なほさむ春行く水に花は散り散る

二人立

鳥

徑

秋は白菊の尊とくも、その御紋の影鮮かに、輝き亘る日の御旗を、山の宿磯の苦屋の軒にも仰ぐ天長のおとほぎ芽出度し。

あの茅出度き日を、人は旨酒に、氣も小春の漫立ちて、謠ひ祝はむ祝ひの席に、年毎列りし例に漏れて、獨り籠りある我のみの秋としも思はる、今日ぞ、偕ていふに忍びざる友垣の、去年は憇、今年は快、快をし悲しまて謠ひ舞はむか、そは獸の業なり。

寫眞品評會秋季大會の案内を辞して、書齋に獨り垂籠めてるたりし我は、今迄手にしたりし一葉の寫眞を、復た元の架に掛け納めて、しばし打詠めたり。

抑も此は、我友素風と其の約婚の人綾子とを、日も去年の今日、ところろは紅葉の燃ゆる想と互に鎮めよと、瀧の川へ我か伴ひて、新に調へし小形の寫眞機もて、拒むを強ひ、紅葉を脊にし二人立ちたるをぞ、我が映寫したるものにぞある。

後より聞けば、おろましきの恨なりき。事多くは不祥に畢るが多ければとて、約婚の中に二人して寫眞撮らぬものぞと、さてこそ其折、綾子のそを知りてか、我は耻かしさに拒むかとのみ、袂を控ゆるやうに只管強ひたるなさけ却りてつれなく、今は悔ゆるも術なき彼等の行末ぞわりなき。

三日見ぬ間の櫻咲く今歳の春、綾子は死にけり。大方は死にやしつらむ。縦し死なずとも、當に心は尼法師、花散りし後の葉櫻に、何を尋ねて何處を彷徨ふてか、疾くにその家には在らずと聞く。

もとを訊せば互に他人の、さて契りては三世の夫婦、そを末だ一世も經ざるまに、隔てられたる身の果は、一世の親の執着など目に入らざりけらし。

一つ盃に口つけせずとも、心と心緊く結びたる縁は既に夫婦、一の軀なりけり。さて人の親は情知らぬ者の。

素風は今異邦に在り。昨日も寄越せし我への書翰は、昔の夢と書

いたる心、思遣る我も涙なり。詳しくは我が思ふだに得忍ばず、况していふ事をや。

我か數持^{かさ}てりし寫真機は、今春以來皆人に傳はりて、銀牌は、外れざりし寫真品評會へ我江春の出品は向後決して見ゆるべし。我が一生寫真に手を染めじと誓ひしは、さる事のあるべしとも思はねど、彼等の破約ど我が撮りし寫真とに、幾何かの關^{かん}あらとかを疑へばなり。

呀、昨年^{こぞ}のけふと今年の今日、偕も頼まれぬ世はつらし夢なし。

疎 律

竹

軒

夕雨にあみ引く男釣る男涼し川上雲ちぎれ飛ぶ
川狩りの腰みの姿西に行けば月は東に華はさや／＼
琴柱たてゝ紫蘭の雨に虫の音に妹がたゆたひ今宵氣高き
蚊やりしてその後襟にすべりいでゝ富士に對へば酒の味よき
語らばじ見まじ聞かじの辻石をわれとまればかつかつばてむ身か

友 よ

紫

袖

君憂愁を春におとなひ
何條いつまで眠らるべしや
君戀情をむくろにかつき
いつまで此に眠らるべしや

又何んの世の光を趁ひて
人になやみの絶えん時ある
君しばらくの翼をひそめ
いつまで此に眠らるべしや
あゝ四十年君が血なへぬ
君が終りに双添えけむ
友の情も昨日と笑みて
いつまでこゝに眠らるべしや

夕の友に春をかこつな

朝の友に榮を説かざれ
これ何の世の君と思ひて
いつまで此に眠らるべしや

花にあざみし一人の友の
こゝらの榮を君に見すると
今日おくつきに笑へるを見つ
いつまで此に眠らるべしや

あらずば遠き君を探りて
妻ある人の梯あらむ
友の幸ある家居のぞみて
いつまで此に眠らるべしや



小百合

秋

團

あ、あすまに、まあ奇麗な。あれは、きうと屹度小百合よ。
と、丁度、心づいた今。

あれ、さゆりが、さあ、行きましやう。

見あげると、はや、なつかしい其姿は、愁つてゐた若草を、やゝ
少しはなれての上に。

すぐ、自分も葉をはなれて、ひらくと、高く低く。

とみると、下の細い清い流には、うるはしいほゝゑみの、同じ
優さしい姿が、ろの静かな面なまに二つ。

はつとして、つと羽と羽と觸れるばかりにより沿つて。

美はしい香。やはらかいろよぎ。

身を斜に、あわたしう、強いて離れて、殆ど水をはふばかり低
く、ひらくと。

いつか身は小百合の上に、一づゝ上と下へ、相別れて、美しくい

瓣に止まツた。で、づつと例のやうに口をすぼめて、蕊のかたはらから觸れると甘い蜜のゆかしい香が、まるで夢のやう。

ほゝゑんで迎へて、小百合は嬉しげに其の蕊の萼をかるく左右にちらつかせた。わが黄の羽は、とある／＼、紅の粉にうつくしく、今、彩られたであらう。

六つの花蓋の、ろれを一づゝ、丁度三つ目に來たとき、一つ上の今朝開いたのへとうつツた。

ど、そまにあるべきなつかしいの姿が、無い。見えない。どあへ。さて夢にも一人で行く筈はないに。

胸が妙に惱やましくなツて、我しらす、花びらをけなれて、三四度、圍をくり／＼とめぐツた。

見えない。果ては、我が弱羽の破れるばかり、はせて走せて、遂に堪得ないで、葉の上に辛くも身を止めて、早き息をつゞけてゐると、途端。あツ、そま、その葉から、わきの枯竹の枝へかけて、張ツた、鋭どい、細かい、其の毒にかゝやいた蜘蛛の網の、それに捕

へられて、たはぬ苦悶にもだえてゐる姿は……。

ぐるりと玉のやうな目に透かして、つとばせよツた蛇蛛と、其間、只一あゆみの中ばには満たない。

葉からすべりおちたのを其盡に、ついと身をふるはして、靱い網の只中へ。鋭く。世もない。物もない。

立ちあがツては、とばかり。色あせた花環を頬に押しあてたとき、腰のあたりに、ろの頭を稍つよくすりつけて、なつかしげに、我が守の中の小羊はひくきこゑをもらした。
(八月終二稿)

その朝

鐵 幹

温泉の宿を出でぬをとめ二人、われを兄とよびて、妹なる人、姉なる人よりは丈たかしと後にて知りぬ。ただちひさき人と思ふに姉なる人、手つなきて山を下りぬ。秋の木立の道かけ、苔に霜うすう見

ゆる朝なり。疏水のタムを右に、あまは南禪寺の裏、紅き薊つみし人、つみしを奪ふやうにしてかざせし人、能く今日の心を盡せしものと、ちさき人見てほほえみしわれ、姉なる人も嫉まじ。永觀堂の池めぐりて、何やら若き僧達に戯れ言はれし、それも趣味ある事に覺えて、その法の袂こなたより引きて驚かさばなど、小聲の二人、御本尊の如來様さき谷め給ひしなるべし。人まつ床几、いまだ人も見えず、落葉たく店の翁に澁茶乞ひて、見頃は今を、四分の秋、高尾、梅尾も説くまじ、思出は永觀堂の紅葉と、倚りかかりむは竹のおばしま、さ云へ二人、昨夜の涙の跡なごりなく、紅葉の映えのまばゆき二人、あのままこの山の彩ある露に消えも往なばと、我れ今更人やらじの思ひ。ひろめし眉を美しとは、美しと見るべしとは、我もほあまりの、ほこりの一人なるかな。指さして、黒き血のやうなるは姉なる人、うす紅のやうなるは妹なる人、われ思はず紅葉に、ながき一人の嫉み負はむとは、その時ぞ知らさりし。

寒かりしさ云へほこりの京の山もみぢに入りし轍わするな

最敬禮

五

浪

けふはもう卒業試験もすんで、あしたの正午すぎからは、エヘン一番、少尉候補生どすましこむのである。僕はそれを考へると、何とも云へなく愉快で、沖に居る艦を見ては、一週間たないうちに、あれでピーツと出かけるのだなと思つて、ひとりてほほえみを禁じ得なかつた。

候補生の服はもう遠うから出来て、居て自分のベッドの下に入れてあるのだ。けふはけさから何處出して見たらう。

どうしても僕はうれしい、たまらなくうれしい。

いよ／＼、就辱の喇叭を合圖に、いとりていろ／＼と夢想しながら横つた。生徒として今夜限りのベッドだと思ふと何たかおかしい様で。

どうだらう、あの服で……あの劔で……艦橋の上で『總員集れ！』

どやつたら……。

どうだらう、あの服で……長いやつを持つて……分隊長が『三千米突』といふのを僕がうけて『打て！』どやつたら……。

どうだらう、あの服で……短いのを釣つて『お父さん只今』と家へ行つたら……。

あゝア實にたまらない。

*

*

*

*

*

*

*

*

フト起床の喇叭が聞いた、『オヤ纏よに居るのかしら』と起きあがつて、四方を見る、お隣の河童も、お向ふの海蛇も、うしろの速射砲も、皆僕みんなと同様きよとくして居る。

『どうした？』

『ウム、ねられなかつた』

『今日からだな』

『そうよ、正午からだ』

と笑ひながら、例の通り毛布をたゝんで、生徒服をつけて出て行つ

た。

正門からは、宮様をはじめ、呉の將校連いけがそろくと来る。

やがて式場に入つて、證書と、賞品との授與をすました。まあ辞令と思賜を頂戴したのさ。すると二三號の生徒は食堂へかけこむのだ。去年までは僕も先登第一にかけ込んだのだが、ことしはすましたものサ、早速自分の室へ行つて、候補生の服をきたの——思ひに思つた、例の服を……。

着るより早く、立食室へ行つた。だいぶ來賓がやつて居るところであつた。

『マアいゝヤナ、一盃飲め』と僕の一番すきな球面三角の教官がいふと、『おれのも飲め』『おれのも飲め』とムヤミと盃が来る。

入校以來三年間一滴も飲まなかつた奴が、うれしまぎれに飛込むのだから随分たまらないのだ。

あんまり酔つたといふので友達とぶら／＼表へ出ると二號の生徒が丁度食堂から出るとあろだ。

何しろ服が服だからしかたがない、昨日までも、今朝までも、『ヤア』なんぞと云ひながら舉手をしたのが、急に立ちどまつて最敬禮である。

こつちは早速好材料をえたといふ風で、
『まあ、その儀には……』
とやる、

『ろう御丁寧ではどうも恐れ入りますテ……』
とやる、わあ、わあ、わあ、で一日を終へる。

かくて一週日の後、『今度此度』を歌つて、僕等は江田嶋を去るのだ。

捨 扇

竹

嶼

あのお方に限つて妾を捨るやうな薄情はあるまい、お便りのないのはもしや御病氣ではあるまいか、あの國は時候か不順で今日此頃は

暑さもまた激しいと聞く、お弱いお身体の御病氣におかゝりなされはしまいか、屹と然うだ、誰か御介抱をするものかあるだらうか、定めし萬事不自由をなされて、あたらう、まゝになるなら飛んで行つて御世話がしたい、然うはいふのも、御病氣ならまだしも御便りがありさうなもの、筆執りも出来ぬ程に御悪るいのか知らん、そんな御大病なら御同僚からでも御知らせがありさうなもの、もう三ヶ月の間御約束のね金の御支送りもなく、妾か苦勞してゐるおとは萬々御承知の筈、おつちから手紙を差上げて御返辭もなく何たる事だらう、東京を御立ちなさる前の晩も、別れか惜しうて泣いてゐた妾を慰めて下さつた、然う、あの内は本郷の西片町だつて、稻雄さんが御自分の書齋で荷ごしらいをなさつてゐる處へ行つて、泣き脹らした眼を半巾で押へて手傳ひをしてあげると、歴のある頬にちよつと笑を見せて、よし予さんまた泣きましたね、これが長の別れといふてはなし、長くて三ヶ月か四ヶ月じやありませんか、私か臺灣へ着て少し懐工合がよくなれば、直くに呼ひ寄せます夫れま

ての辛抱ですよ、譬ひ遠く離れて居てもお互に心さは變らなけりや、一緒に暮らしてゐるもおんなじやありませんか、あなたが今日まで盡して下さつた真心は死んでも忘れは致しません、私故には御両親の御腹立ちでね内に居られないやうにおんななさつたあなた、之を思へは何んな辛苦をしても臺灣で一と旗擧げ、あなたと揃つて御両親を御尋ね申し御勘當を許して貰はねはなりません、暫らくの間東京で辛抱して下さいよ、ねよし子さんと、妾の顔を覗き込むやうにして一と言毎に力を籠めて慰めて下つた御親切に、妾はしはらくとはいへ御別れするのが死に別れでもするやうな氣になつて、又もや涙が眼に一杯になつて一卑ぼろりと膝に落ちた、稻雄さんが之を見付けて、困るなあまた泣きますねえと仰しやるに、いへ然うじやないんですと、泣き顔を隠さうと思つて窓の方へ顔を向けると、澄んだ月が植込みの檜を照らして宛るで晝のやうで、向ふの杉垣の根に蟬が頻りと秋の哀れを泣き立てゐる、あの虫も秋に別れるのを悲んでゐるのであらう、妾も稻雄さんと別れるのがつらくて泣いて

ゐると氣を落ちつけて聞けば聞くほど其聲が細々として悲しさを増して来て、何となく氣か遠くなるやうな心持になり、一層死んでしまいたくなつて来て、両眼は押えきれぬ程に涙か出てばら／＼と疊に落ちた、稻雄さんに見られては腑甲斐ないものだと思つてつかしはなされぬかと、これを紛はさうと思つて半巾でそ／＼と疊を拭いて不途氣がつくと、窓からさした月に稻雄さんのすらりとした影が妾の前にさしてゐる、妾ははつと思つて見返へると、稻雄さんは妾の後ろに立つて入らしつた、顔と顔と見合はせた時、稻雄さんが右の手を妾の肩に措いて、よし子さん然う泣いちや困りますよ、先刻もあれ程申したではありませぬかと、キリミツとした口元に凜とした聲で仰しやるに、もう／＼決して泣きません、あんなり女々しうございませぬと態と笑ひに紛らして其晩はそのまゝ臥床に這入つた、夜の更けるに従つて秋の寂しさも増して来て、身の行末から稻雄さんの行末が案じられて一と晩眠りに過ごしたつけ。

翌日新橋停車場へ御送りした時は、人目もあるんで心を鬼と取直し、

涙一滴溢さぬやうにしよう。堅く心では思つて居たけれど、稲雄さんの御出立を促すやうに鳴る涼笛の聲が、憎らしいやうな悲しいやうに聞へるし、また待合の時計の針が進むて行くのが情けないやうに思はれ、あの時計が一層止まつてくれ、はよいがと、つまらぬ考へを起したのも、矢ッ張り分れともないからであつた。夫婦連れで旅行する人を見ると直ぐ妾の身につまされ、妾もあんな風と一緒に旅行でもするんなら、何れ程嬉しいことであらうと、見るもの聞くもの稲雄さんと妾の身の上になつて来る。あんなことなら送つて來ねばよかつたと思つた、が、一分一秒間でも稲雄さんの傍に居たいので、悲しい事は知りつゝも此所まで送り返したのだ、暫くすると發車を知らせるベルが鳴るので、人々はホームへぞろ／＼と行く、妾も稲雄さんの跡についてホームへ行くと、稲雄さんが客車へ乗り込むと直ぐ窓から顔を出して、身体を大事になさいよ、都合さへつけば直ぐに呼び寄せます、暫らくの辛抱ですよと、今は人目も憚らずに繰返えして仰しやる御心切の御言葉に、妾は云ひたい

ことも云ひ得で點頭いてゐた、憎くや車掌が鳴らす笛に涼笛か鳴つて涼車は動き始めた、稲雄さんは帽子を取つて御機嫌よろしうの御言葉をお残しなさつたが、其御言葉が終らぬ内に涼車はもう見へなくなつた、もうお顔も見ることが出来なくなつた。

これ程思ふてゐる妾の心を御存じの稲雄さん、御病氣なら其様に御便りがありさうなもの、夫れとも病氣を知らせたなら妾が心配するからとて、態とお知らせがないのか知らん、夫れとも若しや奥さまでも出来はしまいか、まさか、まさか、あの方に限つてそんな事が……
是れは妾の邪推なんだ、

*

*

*

*

*

*

*

近き頃本郷田町の瘋癲病院へ入院したる二十歳計りなる婦人の患者あり、賄所での立話を聞けば何んでも男の爲に氣が違つたとやら、其男が薄情なので氣が狂ひしとやら、あの標致まひらひで狂人とは惜しいものだとの噂である

上野公園で古川稲雄を見かけたものがあるが、立派な服粧に大丸鬘

の婦人を連れにしてゐたとか、此婦人は彼れの情婦よし子ではなく全
く他の婦人であつたものと話し。

金 風

竹 嶼

隣には百万週の夜寒かな
打交り咲や隣と内の萩
野も山も月のものなる名の夜哉
名月や芒さしたる古德利
雁渡る下や漁村の夕渡し
草の戸や月見ながらの糸車
朝顔の萎ますありや雨の正午
毛見の衆を迎ふ庄屋や数袴
剛むく小家縷きや秋の暮

虹 霓 雑 談

記 者



▲彩虹記者に呈す——方今わが青年界に、鮮明なる旗幟を立
て、文學に、天下を活歩するもの、吾人先づ指を大雜誌彩
虹に屈せざるべからず。眞に彩虹が評論の如何は、天下青年
をして興廢を決せしむるに足れり。吾人微力、私にこれを羨
むこと久し。頃者、彩虹記者、書を吾人に寄せて曰く、白虹
なる小雜誌出づ、蓋し吾人の威名を借して特に虹字を題す、
白虹は支那に於て最も不吉なるなりと、あゝ吾人の不肖、
未だ白虹の字義に於て不吉なるを知らざりしなり。あゝ吾人
の不肖、白虹なる小雜誌を公刊する迄、既に虹彩なる大雜誌
が天下文壇に雄飛せるを知らざりしなり。かくて吾人の不肖
は終に虹字を冠して大なる雜誌彩虹に疑似せんとせしかの如くに吹聴せられたり。また吾人の不肖は最も不吉な
る字義を有する白虹を吾人が吾人としての最大苦心に依て生れしめたる小雜誌に題せり。吾人は彩虹記者が注意
に依て自から自己の不肖を知り啞然たること眞に多時なりきされど不肖なる吾人はよく白虹なる字義を知れり。
晋元帝の時、著作郎の郭璞が、その鯨魚贊に記すと、**壯士挺劍氣激白虹、鯨魚潛淵出而悚のそれ、あゝ白虹**
はかくの如く雄大なり、かくの如く豪壯なり。
曾つて虹字の義を探りて、凡日旁氣色白而純者名爲虹（釋漢那觀傳）、を得たり。吾人の不肖、或は其誤れるなき
やを恐る、こゝに得たる典故を記して、彩虹大記者の高教を待つ事然り。

▲**河**——鳥水君近著、銀河といふ、維摩の筆は、走つて、冬の富士となり、箱根火山雲の外輪を距るの記となる。美術の觀察は化して丹波山となり湖論となる。巻頭自題の短歌一首、君が隠し藝なり、曰く、夜ごと夜ごと深き思ひを宿したる星か落ち散る石のきれ屑」と成美君の表紙願ふよし、梶の葉に七夕を寓したる、趣あり。たゞ君の名あるや、毫を門に乞ふもの多きより、筆漸く倦むの状あり、銀月おさむるところの海水浴の如き、誠にうらみ多し。妄言。

▲**彫塑**、佛像の羈絆を脱してより卅年、寫實に、富意に、未だ名作なし。何ぞや。曰く彫塑家が單にマンの爲めに刀をとるのみにして、一の劃策する處なければなり、競技會は勤業場の如く、審判官は盲目、美を知らず。かくの如くして終に進歩しえざるなり。

▲**方形**の材を取て、先づ圖を思ふ、彼等の多數は如何せば客受よきや、賣口ありやを思ふなり。他日成るの日にれを見れば單に骨董屋の喜びそうなもののみ。あゝマンは終に藝術家をして盲せしむ。

▲**乱れ髪**——みだれ髪は新詩社の風あき子女史が歌集なり。女史が奇髻なる格調、新奇なる構想は、燃ゆるが如き紅情紫恨をのせて通巻六篇三十九首、これに藤島氏二氏が巧妙なる繪圖を挿みまた同氏が豊富なる意匠になれる体裁を以て飾る。

現文壇の珍たるや論なし。
 篇中の作物は概して『明星』誌上に一度表はれしものにして篇を分つこと次の如し。曰く胭脂紫、蓮の花船、白百合、はたち妻、舞姫、春思、而して武二氏が繪語は、戀愛、現代の小説、白百合、春夏、秋、冬の七なり。

▲**久保天隨**の近著。繪本等は博文館より題中放言は鐘美堂より共に本月中に出版せらるゝよしにて既にその校正を了れりといふ。
 ▲**島崎藤村**氏の落椿集は春陽堂より八月下旬發行せられたり。

白
虹

國詩雜誌 (三)

與謝野鐵幹

之を從來の和歌に比べると、思想なり、趣味なり、それを現はす修辭法なりが、大變な相違です。舊派歌人は『月』を歌ふのにも、「月みれば千々にものこそ悲しけれ我身一つの秋にはあられど」と云ふ様な散文的説明的のものか、「家路まで送らむ月の影ながら別れて歸るこちこそすれ」と「別れて歸るこち」位の即興的地口的の感情を喜んだものですが我々はそんな單純な事や陳腐な趣味には満足してゐない。『月』を主題にして歌ふと云ふ事が第一ない。月と云へば必ず他の副景物に使つてゐて、叙景で云へば淡白な文人畫でなくて濃重な油畫の月であり、叙情で云へば複雑な主觀を具象的に現はす道具のその一つに用ゐるのである。例へば『うらわかき御僧とのみに忘れがたき月のしら蓮帳哦のおばしま』と云ふ歌の中の『月』の様なもので、『月』を主にしては歌はない。この歌の意は、しら蓮に月がさしてゐた嵯峨の宿のおばしまは忘れられぬ、なぜと云へば、深い戀ではないが、その夜そこで泊り合せた僧の君の、唯だ若く美しかったと云ふだけの思出に忘れられない、と云ふ

女の歌だ。しら蓮と云ひ、おぼしまと云うて、水に近い宿と云ふ事も分かり、嵯峨と云ふので、泊り合せた僧も作者たる女も、品のある趣味の解つた人の様に想はれ、うらわかき御僧と作者と、月夜の蓮の花が能く調和してゐて、讀者までが其夜の事をなつかしう感じる。かやうな複雑な内容なり趣味なりは、舊歌人の夢にも知らない所で、それを現はした修辭がまた舊歌人の用ゐない所だ。「月さす池のしら蓮」とても云ふ所を「月のしら蓮」と云ふのは從來の修辭ではない。これらはホンの一例に過ぎないが、近頃人々が試みてゐる短歌の内容なり形式なりは如此き傾向を以てゐます。複雑な内容を現はすのには、どうしても從來の所含の淡泊な用語ではダメですから、自然一首の歌の中に名詞がふえて、無用の説明的形容詞や動詞や助動詞が省略されて、名詞と名詞との連鎖は讀者の聯想的判斷に待たれば成らぬ、從來の短歌が餘りに説明的の贅語が多かつたのは、内容が單純であつた故で、今日の人々の作に、名詞や新しい造語やが多く用ゐられるのは、内容が複雑に成つた故だ。頭腦の痴鈍な趣味の低い讀者には、説明的散文的の舊派の歌で無ければ分かるまいが、作者と同じ頭腦の複雑な人には、所含の量の多い今の新派の詩を喜ばるゝであらう。委しい解釋は『明星』に掲げてゐる「鐵幹歌話」に譲るとして、造語のものを少し云ひます、從來の歌では古人の用ゐ

ない言語を歌に入れるのを避けた、のみならず、古人の用ゐた言語でも禁じて用ゐさせぬ言葉が有つた位だから、見なれぬ人は、我々の歌の用語の新しいのを怪む人も有らうが、前に云つた通りに複雑な新しい思想を現はすには、どうしても造語をすとか、用ゐなかつた言語を探すとか云ふ事に成る。僕等は服部君の様に、古語、寧ろ死語、字引を引かれれば分らぬ古語を復活させやうと云ふ考も技術をも持たないので、成るべく普通語、今の中等教育を受けた人々に分る程の普通語の中から用語を選択すると共に、新しい若くは複雑な概念を現し得べき言語謂ゆる造語を組み立てる所存です。その造語には色々ありますが、「月のしら蓮」と云ふやうなものあれば、草深い所の月夜を「武藏野にとる手たよげの草月夜かくてもつよく京を出できや」と云ふやうに「草月夜」と云ふ造語で現はし、その外、修辭學で云ふ擬人とか隱喩とか諷喩とか換喩とかを多く用ゐるもの、例へば、「小川われ村のはづれの柳かげ消えぬ姿を泣く子われ見し」と云へば「小川」を擬人にして物を云はせ、「それと見たる嫉みうつくし草染の左たもとに投げ入れし神」と云へば「嫉み」と云ふ抽象的のものを擬人にして見てゐる。これらの造語と云ひ、修辭法の新しいと云ふのは、舊歌人に嫌はれるのですが、夫は分らないから嫌ふのです。僕等は今日現に之等の内容なり形式なりに就て研究中ですから、姑

く世の識者から時間を假して頂いて、ごんな出来ばはびするかを見て頂たいと思ひます。(完)

袖片

月刊新詩集

者	筆	執
薄田泣菫	すゝしろのや	窪田五つぼ
		國木田獨歩
		平木白星
		鳳あき子
		河井醉茗
		結城素明

定價五十錢

新文社詩友會發行

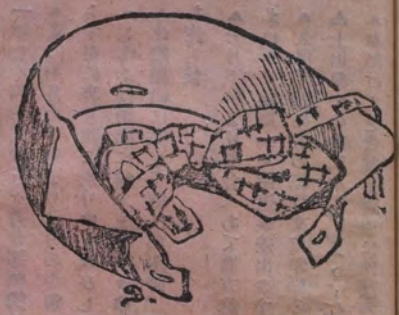
明治三十四年九月十日發行白虹第三號附錄
 發行兼編輯者 東京市日本橋區大傳馬町二丁目廿一番地 伊藤 喜六
 印刷者 東京市麴町區飯田町四丁目廿一番地 大野 喜六

△會告▽

○第二號發行の前數日、本會創設以來専心會務に盡力せられ候矢橋夕影君突然發病致され候、よりに小子等は直ちに事務の整理に着手致し種々苦心の結果漸く第二號發送致候始末にて運送の分も冬かるべくと存候、何卒右御承知の上御宥恕被下度候。

○其後矢橋君は久しく筆を絶たるべき由にて本會の全權を小子等へ委られ候、されど常にアルジエアラヤらフ井シツクやらになやみ居り候小子等は到底發賣の事務をも取扱かれ候より、これを文友館伊藤氏に依頼致候

○依て本號以下『白虹』購讀者諸君は同處へ前金御拂込被下度候



「白虹」發賣所
購讀申込所

東京日本橋區大傳馬町
二丁目廿一番地

文友館

○同時に從來矢橋君宅に置き候本會事務所をも發賣所文友館内へ移し申候に付、『白虹』編輯上の書信、投書、會友諸君の詠草、會費、とも必ず同處へ御送願上候。

「白虹」編輯所

東京日本橋區大傳馬町一
丁目二十一番地文友館内

素娥文學會

○かくの如く、本會の事務上に於て矢橋氏とは爾來一切關係無之候
○其後矢橋氏は霞ヶ浦を経て高濱より大洗へ廻かれたるよしに候

▲こゝに事々しく申上候ふ程のことには之なく候へ共、本會にても種々消費高多く相成候ため、止むを得ず本月より會費金拾錢と相改め申候、就ては左記の割合に改算致候間至急會費前金切の諸君は御送被下度候。郵券代用は五厘又は壹錢に申候爲替は小傳馬町宛に願上候。

一本年六月郵税共二ヶ月分即ち拾八錢を投ぜられたる諸君は九月より起りて二ヶ月以上任意に御納金のこと一同じく三ヶ月分貳拾七錢を投ぜられたる諸君は九月分に壹錢の不足これあり候ふ故十月より起りて任意御送金有之度、尤も金壹錢を御加算有之度候

一同じく四ヶ月分五ヶ月分等御拂込の諸君には前金相切候ふ節改めて申上べく候、
▲實に七月の下旬より八月の中旬にかけての本會は、所謂危機一髪といふ所にて候ひし。兩人が此間に車にも乗らず東に奔り西に走り申し候ひしは先輩の諸君及在京の會友諸君がよく知らるゝ所ならむと存じ候。今更くりかへし候ふは愚痴に候ふまゝ一々申上す候。

▲此號編輯に際して特に興謝野、服部、河井、前田の諸先輩より諸般の注意を與へられ候、こゝに謹でその高義を謝し候

▲七月下旬より本會へあて地方誌友諸君より懇厚なる書簡を送られ候へ共、何分前述の次第にて兩人共奔命につかれ居り候爲一々御返事差出さすこゝに記して謝意を表し候

▲久保天隨先生の紀行文は印刷の間に會はず遺憾ながら次號に掲載いたすべく候。
▲上田學十の美文集『みをつくし』は近々出版せらるゝ由に候。

▲本誌はもと會友諸君並に他讀者諸君の作物寄稿を待つものに候。さるを毎回の投稿數甚だ少きに過ぐるは小子の弊に歸せむとこゝに御座候故に規を以て制するは欲せざる所に候へども、文はすべて廿字結たるべく、月の

廿日を以て限り每號大に御に投稿下されたく希望いたし候

▲前號虹霓雜誌中記するところの第四、五、八の三項は正に小生等兩人の手に依りて成りたるものには之なく候いづれよりか出で、生等が不知の間に印刷し終りたるものに御座候。されど筆のあまりに無責任なるまゝ、一言辨じおく次第に候。

▲白馬會の城浩翼君今回入會いたされ候。

八月三十一日夜

(三機、秋圖しるす)

轉居

東京府南葛飾郡吾嬬材字請地五十六番地

梁平橋より東七町
萩寺より西北五町
百花園より南六町

服部躬治

九月一日

いかづち會

文庫

文庫は文壇唯一の**眞自由郷**なり現今幾千百の模倣雜誌が青年を無視し青年の作を侮蔑せる明治二十二年に於て蚤く既に青年を友とし青年の爲に自由共和の詞壇を築きたり

迎詩は左の三先生の**嚴正**なる**選擇**を親切にし**興味**多

評語掲載す盛觀他に

比すべきものなし

選評者

俳句 内藤 鶴雪君
和歌 服部 躬治君
漢詩 岩 溪 裳 川君

發行所 定價金拾二錢六冊前金六拾六錢拾二冊前金壹圓廿錢郵税一錢

東京府田區南甲賀町八番地

内外出版協會

白虹

明治卅四年六月十三日內務省許可
明治卅四年九月十日印刷發行

禁轉載

編輯兼發行人

伊藤時

印刷人

大野喜六
東京市麹町區飯田町
四丁目卅一番地

發行所

東京市日本橋區大傳
馬町二丁目交友館內

素娥文學會

賣捌所

東京盛文中屋

北隆館
文成館

勉強堂
上田屋

定價金八錢郵稅金二錢